

野の師父 野村胡堂・あらえびす

——「自地域学」と社会科教育の結合を探求しつつ——

箱石 匡行*

(1996年11月28日受理)

Masayuki HAKOISHI

A Fatherly Master of the Field, Kodo=Araebisu Nomura
— In Researching for the Connection between “Domestic Studies”
and Social Studies —

はじめに

野村胡堂・あらえびす、これは野村長一（のむら・おさかず）の二つのペンネームを結びつけた表記である。彼はこの二つのペンネームを使い分けている。小説や一般的な評論を執筆するときには野村胡堂と署名し、音楽関係の評論や著書では「あらえびす」というペンネームを用いているのである。したがって野村長一である野村胡堂・あらえびすの業績は、つぎのような三つの領域に分けて考えることができるであろう。

- (1)大衆文学作家とくに銭形平次捕物控の作者としての野村胡堂
- (2)西洋音楽の紹介者、レコード音楽の評論家としてのあらえびす
- (3)野村学芸財団の創設者としての野村長一

それでは、いったい、どのようにして野村長一がこのような仕事をするようになったのであろうか。また彼がそれぞれの領域でなぜ、このような業績を遺すことができたのであろうか。もしこういったほうがよければ、野村長一はどのようにして野村胡堂・あらえびすとなることができたのであろうか。ここでわれわれが試みようとするのは、野村胡堂・あらえびすの生涯と業績を岩手の風土性との関連において把握するということである。このことは、社会科教育を「自地域学」(domestic studies)との関連において捉え直そうという観点から¹⁾、そして今日の道德教育の地域教材を開発するという観点からも必要なことであろう。とくに後者の点についていえば、野村胡堂の人生がすでに道德教育の教材のなかに岩手県郷土資料の一部となって入っているのである²⁾。

*岩手大学教育学部

I 小学校の頃の野村長一

野村胡堂は明治15年(1882年)10月15日、岩手県紫波郡大巻村(明治22年から彦部村)に生まれた。本名長一、父は長四郎、母はマサ。長男は出生後間もなく死亡している。そのため次男であったが、長男の扱いをうけ、長一と名づけられる。

野村胡堂の仕事に結びつく関心は小学生の頃にすでに芽生えていると言えることであろう。小説の濫読、絵を描くことへの関心がそれである。彼は小学生の頃を回想しながら、「私の読書癖はそのころ始まったらしい」³⁾と記している。この頃から彼は本に親しんでいる。彼は『小国民』といった雑誌を待ちこがれ、巖谷小波や石井研堂の物語に心を引き付けられていたのである。『水滸伝』や『八犬伝』『絵本太閤記』といった本しか知らなかった少年にとって、翻訳小説の世界は大きな驚嘆の念を感じさせるものであった。しかしこの読書癖は彼の父親をたいそう心配させるものでもあった。

長一の関心の向かうところは小説の世界だけではなかった。この少年は絵を描いたり工作をしたりすることも大好きであった。胡堂はこう回想している、「私が十歳前後の時は、絵を描いても叱られ、工作をやっても叱られたものである。私は後々までその習癖が残っていたが、絵を描くことが非常に好きで、お小遣があれば、水彩画の安絵の具を買って来て、画用紙に富士山を描いたり、武士を描いたりしたものである」⁴⁾。父親はこうした長一をひどく気にして、「お前を絵描きなんかにはしない」⁵⁾といて、絵の具を取り上げ、その絵を破り捨ててしまったりしたのである。今日のわれわれからすれば芸術に理解がない父親ということになるのかもしれないが、長一の父にとって絵描きの姿とは「村から村を回って、フスマや掛軸に下手くそな松竹梅などを描き、わずかばかりの紙包みをもってゆく旅絵師の姿だけだった」⁶⁾のである。

また村の小学校に幻燈というものが来た。それを買ってもらおうと長一は父にねだるのであるが、小さいものでも九十銭もするからといて買ってもらえず、かえって叱られるのであった。そこで彼は凸レンズを買ってきたりガラスを切ってもらったり工夫しながら、幻燈器を作り上げて得意になっていた。ところが父親はそれを見て、「お前をオモチャ屋にする気は無い、それよりも経書を読むとか、学校の勉強をする方が大事だ」といって、鉈を持ち出して長一の幻燈器を壊してしまうのであった⁷⁾。

胡堂はそうした幼い頃を回想しながらこう語っている、「あんな事があつたにしても、私は決して父親を怨んでいるわけではなく、今でも心から父を愛し慕い続けている。父親が絵の具をこわしたのも、幻燈器械をみじんに砕いたのも、慈愛の現われであり、時代思想のせいでもある。その父親が、私の濫読を惧れて、柔らかい本を全部売ったところで少しも無理はないわけである」⁸⁾。

小学校の高等科のころに、長一は蓄音機というものを初めて知ることになる⁹⁾。「蓄音機というものを初めて聞いたのは、私等がまだ小学校へ入ったばかりの頃でした。何百人かの生徒が代る代る器械の前に立ってゴムの管を耳に入れると、変てつもない雑音が、蚊の鳴くように聞こえたものです」¹⁰⁾。この頃に彼が蓄音機に熱をあげたということはないようであるが、これは後年の彼を虜にすることになるのである。

野村胡堂は小学生の頃、このように絵を描いたり、父親の蔵書のなかから小説の類を選

んで読みふけていたのである。父は学校の勉強をあまりしない長一を心配し、ときには叱りもしていたのである。彼は後になって画家になることを夢み、また文学の道へ進みたいという強い願いをもつことになるが、そうした願望はすでにこの頃から芽生えていたのかも知れない。

II 盛岡中学時代の野村胡堂

小学校を卒業した長一は、明治29年(1896年)4月、岩手県尋常中学校(明治34年より岩手県立盛岡中学校)に進む。この学校は多くの分野で活躍する優れた人材を数多く世に送り出している。とりわけ胡堂在学中の盛岡中学はこの学校史上でも他に例を見ないほど「最も豊作」¹¹⁾の時期といわれる。たとえば、米内光政、及川古志郎、田子一民、郷古潔、金田一京助、小野寺直助、弓館小鰐、石川啄木などが在学していたのである。盛岡中学の五年間、胡堂は多くの優れた友人をもち、その交友関係は生涯をとおして長く続いていくことになるのである。医学者となる小野寺直助は晩年の胡堂の健康を気遣って、上京の折々に身体を診てあげていた。また金田一京助は胡堂の葬儀に際して、感動的な弔辞を述べるのである。

野村胡堂は当時の盛岡で名高かった猪川塾を下宿先とする。この塾に決めてくれたのは、原達(俳号抱琴)である。原達は原敬の甥であり、俳句に優れ正岡子規にも愛された。彼は帝国大学法科でもめずらしい秀才といわれたが、20歳で夭折する。漢学の猪川先生が主宰するこの塾で、胡堂は岩動孝久(俳号露子)、菊地健次郎、猪狩見竜(俳号五山)らと同室になる。野村も董舟を俳号とし、優れた友人たちとともに句作を楽しむ。野村董舟は仲間の岩動露子、岩動炎天、猪狩五山、猪川箕人の五名で夏に秋田への吟行を試み、後年、その思い出を楽しそうに記してもいる。

及川古志郎(後の海軍大将)も中学時代には文学青年であって、胡堂の仲間であった。胡堂は及川から一年後輩の石川啄木を紹介されるのである。この優れた詩人は、明治45年(1912年)、26歳で亡くなる。その死にいたるまで交際を保ち親身に面倒を見続けたのが金田一京助である。これは「日本友情史上の模範的行動」¹²⁾ともいわれるものである。

胡堂がその生涯をとおして尊敬していたのは、郷土岩手の先輩でもある田中館愛橘博士と新渡戸稲造博士の二人であった。後に田中館愛橘の養子となる下斗米秀之進(秀三)と胡堂は盛岡中学で同級であり、また新渡戸稲造の甥の安村省三も胡堂の若い時代の友人だったのである。

また胡堂は盛岡中学の四年生のとき、他の生徒たちとストライキを行っている。若くて優秀な先生たちをいびり出す年配の先生たちに引退してもらう、というのがその主張であった。生徒たちは全員何の処分もなく進級し、一方、先生たちはほとんど退職か転任になり、かわって後には若い近代的な先生たちが東京から補充された。これがその結果であった。ストライキは一見、成功したかにみえた。しかしこれを境に、盛岡中学はこれだけの豊作の時期をふたたび見ることがなくなるのである。胡堂は「私が生涯にやったことで、盛岡中学のストライキだけは、唯一つ失敗だったのではないかと思っている」¹³⁾と述べている。

このように盛岡中学で存分にその青春を謳歌していた胡堂も、やがて自分の生涯を選び

取らなければならない時期を迎えることになるのである。

Ⅲ 父と子の対立そして和解

父と子の対立、これは青年期になると誰もが経験することであろう。この対立をとおして、ひとは自分の生き方、自分の人生を確立していくものであろう。野村胡堂の場合もその例外ではなかった。父親は長一を医師にしたかったのである。村長をしていた父は、息子が医師になって村人のために貢献してくれることを強く願っていたのであろう。しかし息子は医師になるつもりはなかった。彼は画家かあるいは文学者になりたいと考えていたのである¹⁴⁾。こうして父と子は対立せざるをえなくなるのである。

胡堂はこう述べている、「とにかく、私は、医者だけはどうしてもいやだった。絵描きが駄目なら文学だが、文学で飯の食える自信はなかった」¹⁵⁾。父は医科に行けという。しかし子は文科なら行くと主張して譲らない。そうしたなかで法科に進むことで二人は妥協することになる。父のほうからすれば子が役人か弁護士にでもなる夢で我慢をし、また子のほうは文科でないが医科ではない、法科に進むことで歩み寄ったというわけであろう。

胡堂は明治35年(1902年)3月、盛岡中学校を卒業、ただちに第一高等学校受験のため上京、主に本郷に下宿している。胡堂の後を追うように上京した石川啄木と交友関係をもつ。二人の間には書簡の往復もあった。そして明治37年(1904年)9月、彼は一高に入学する。文科に進みたいと願ったが医科を勧める父と妥協して、胡堂は法科(仏法)に進むことになったのである。当時の校長は盛岡出身の新渡戸稲造であった¹⁶⁾。

このように、野村胡堂は二年数か月にわたって東京で受験勉強をしていたのである。この二年あまりの間は、父と子の対立葛藤の時期でもあったはずである。むしろ父と子の対立葛藤がこの二年ほどの間続いていたと見るべきであろう。しかし父と子の対立は人生の進路だけではなかったのである。

人生においてもひとつ重要なこと、結婚をめぐつてもすでに盛岡中学時代から父子の対立は芽生えていたのである。野村胡堂が思いを寄せていた女性、それは橋本ハナである。ハナは、明治21年、長一と同じ紫波郡彦部村に生まれている。彦部尋常小学校を卒業、岩手県立高等女学校、日本女子大学校附属高等女学校をへて、同大学校教育学部に進学。橋本家は士族の家柄、そしてハナは盛岡の大沢川原教会でキリスト教の洗礼を受けていた。この二人の結婚に双方の家族が反対した。しかし胡堂の父長四郎は村の振興事業に失敗、破産して困窮のただなかにあったが、ついに二人の結婚を承知する。和解がここに成立することとなる。長一とハナは明治43年(1910年)3月、結婚する。この時、二人はともに在学中であった。そして約5ヵ月後、父野村長四郎は死亡するのである(享年54歳)。

Ⅳ 野村胡堂と石川啄木

野村長一が石川啄木に出会ったのは盛岡中学においてであった。これは及川古志郎の紹介によるものであった¹⁷⁾。その時の様子を胡堂はこう述べている。

『野村。お前に、こいつを紹介するよ。石川とって、一年下だが、何か書いてい

るそうだ。見てやってくれないか』

みると、及川の横に、こまっちゃくれた少年がいる。私も、及川も、身体は大きい方だったが、それに比べると、三分の一もないくらいで、骨組みや腕ッ節になる養分が、ことごとく知恵の方へ回ったという顔をしていた。これが、石川啄木との、初対面だった。その時、直してやった新体詩は、字句は忘れたが、正直なところ、おそろしく下手くそだな、と思った。後年、あんなに有名になろうとは、もちろん、夢にも考えなかった。」¹⁸⁾

こうして野村胡堂は石川啄木と交友関係をもつことになるのである。

また野村胡堂と金田一京助との交友関係はこの中学時代からその死にいたるまで長く続くのである。京助は当時の胡堂を回想してこう書いている、「四年、五年のころから盛岡中学に文芸熱が起こつて、そのなかに二、三の系統があった中に、野村君の率いる雪月花の組は、一番はなばなしかった」¹⁹⁾。その外には田子一民の主催するもの、そして一級下の阿部月衣が独立していた。

この当時、石川啄木は野村胡堂の一級下であり、啄木は胡堂に一目おいていたのである。京助はさらにこう記している。「中にも、野村君は、評論もすぐれていて指導的だったが、小説がまた鏡花ばりの、艶麗な筆を揮われたし、何かと一番よく物を知つておられ、啄木の和歌の投稿を受け取つて、鼻をつまみながら『みだれ髪調で、はなもちがならない』など痛烈な批評をそのころにはくらわされていたものだった。同級の間では断然威張つていた啄木も当時まだ十五歳の模倣性のつよい少年に過ぎなかつたから、野村君には一目おいているものだった。」²⁰⁾

ところで後年、胡堂は啄木という人間の魅力を語っている。「啄木という男は、社会人としては、厄介な人間であった。ほら吹きで、ぜいたくで、大言壮語するくせがあり、まことにつき合いくかかったが、その半面、無類の魅力を持った人間でもあったのである。おしゃれで、気軽で、少し陽気すぎるほどで、そして何より美少年であった。異性の友人を吸いよせただけでなく、のちには啄木と絶交した人たちも、一度は彼の不思議な魅力に傾倒していたはずである。」²¹⁾

さらに胡堂は啄木の非凡な才能について次のように述べている、「その上、啄木の才能は非凡であった。中学二、三年までは秀才中の秀才であり、その後は文学少年らしい怠け者になってしまったにもかかわらず、英語も相当読みこなすし、ヴァーグナーからメレジュコフスキーに入り、さらにクロポトキンへ歩んだことは、彼の遺した大学ノートに明らかである」²²⁾。

そして啄木の詩人としての業績について、胡堂はこう語っているのである。

「二十七歳で死んだ石川啄木は、詩人としては明治、大正両時代を通じての第一流であったことに疑いも無い。わけても啄木の歌はまったく独自の境地で、一部技巧派の歌人の中には、啄木を軽蔑することをもって、玄人らしいと考えている人もあるらしいが、今から五十年百年経って、世は移り人は変わった後に、誰が果たして一番大きく残るだろうか。これはなかなか面白い問題である。

だが一方では、啄木は偶像にされ過ぎる嫌いもないでは無い。啄木は人好きのする

男であり、聡明で陽気で、そして少しばかり見栄坊で、誰にでも愛されたが、性格的には謀反^{とほんま}気の強い、負けず嫌いの、そして年相応の稚気も虚栄心もあった男である。詩人バイロンがこういう一面を持っていたかもしれず、小説家国木田独歩が、いくらか似て生まれたような気もするのである。」²³⁾

それでは野村胡堂と石川啄木の交友関係とはどのようなものだったのであろうか。かつての友人であった啄木を回想し、友情と尊敬の念をこめて胡堂はつぎのように語っているのである。

「啄木は斯う言つた人間であつた。歌にも小説にも、争いと戦ひの気持が充ち満ちて、勝つか、負けるかが、啄木の一生を支配した思想であり、啄木の大きな欠点でもあつたのである。私は曾てそんな事を意識した覚えも無いが、啄木は最初から最後まで三番勝負に勝ち続けてゐるにも拘らず、私に対して激しい闘争心を燃やして居たことであらう。

可哀想な啄木、私は四十年前の啄木に対して、愚かな兄のような心持でさう思つて居る。可哀想な啄木、—だが、今にして思へば、君は一番幸せであつたかも知れない。我等の仲間、君ほど偉大になつた者はなく、君ほど大衆に愛されてゐる者は無い、百迄生きてゐたところで、私達は、君の靴の紐を解くにも足りないのだ。」²⁴⁾

この文章は胡堂の心境を率直に述懐したものであつて、読む者の胸に痛切に訴えてくるものがあるはずである。画家かそれとも文学か、と考へていた胡堂にとって、いずれの道も塞がれて法科に進んだのであつた。しかも文学への道は辛うじて大衆小説の世界において実現したとはいえ、かつて中学生の頃には上級生として啄木の作品を批評したり直してやったりしていたことを振り返ってみれば、胡堂にとって啄木の文学的世界での大きな成功には言い現わし得ぬ何ものかが有つたに違いないのである。

たしかに啄木は現実の生活においては破綻者であつたかも知れない。しかし彼ほどに多くの人々から親しまれ愛されるならば、詩人として文学者として大きな成功を取めたと言ふべきなのである。一方、野村胡堂は長男として父親の借財を引きつい、これを返済するために、またハナとの愛が成就してようやく始まったばかりの結婚生活を維持していくために、生活をしっかりと築いていかなければならなかつたのである。そのためには文学への道は放棄しなければならなかつたのかも知れない。父の死によって大学で勉学を継続することは困難となり、彼は報知新聞に入社する。この頃には、胡堂は文学者としての将来は断念していたのかも知れないのである。

そして空想科学小説、少年少女小説、時代小説といった分野で胡堂は名を成していくのである。しかし大衆文学の世界での成功が胡堂の心を充たすものではなかつたはずである。われわれはそれを、コナン・ドイルについて彼が述べる文章から読み取ることができるのである。「コナン・ドイルはその自叙伝のうちに、『私もしシャーロック・ホームズなどというものを書かなかつたら、文壇的にはもっと高い地位を勝ち獲たことであらう』というようなことをいっている。コナン・ドイルとしては当然の述懐で、まことに同情に堪えないが日本の読者なる我々に取つては、シャーロック・ホームズ無しにコナン・ドイル

の存在は考えられず、ホームスを書かないドイルなどは、まずどうでも宜いように思うのが一般人の常識であろう。」²⁵⁾

このような述懐はほぼ同じような文章で他にも語られているのである。そのうちの一つを、さらに引用することにしてしよう。

「コナン・ドイルの自叙伝^{じじよてん}を読むと、あれほどの人でも『私がシャーロック・ホームスを書かなかつたら、文壇的にもう少し高く評価されたらう』と書いている。作者自身としては、まことに同情すべき言葉だが、我々読者からいうとシャーロック・ホームスを書かないコナン・ドイルなどは到底^{とうてい}考えられず、またドイルの歴史小説や長編小説などは、そんなに面白いもの^{おもしろいもの}だとはどうしても思えないのである。

私は——私風情^{ふかざと}はといった方がいいだろう——銭形平次や池田大助を書いたことを少しも後悔はしていない。反対に、シャーロック・ホームスの愛読者であった父——五十五歳で三十幾年前に死んだ父に、私の銭形平次を読んで貰えなかったことが、何よりも口惜しいことだと思っている。」²⁶⁾

野村胡堂はどうしてこのようなコナン・ドイルの言葉にこんなにもこだわっているのだろうか。池田大助や銭形平次を書かなかつたならば、いわゆる純文学の領域の仕事をしていたならば自分にとって別の人生が、別の世界が開かれていたのではないのか、そういった思いが胡堂の心のなかに刻み込まれているのではないのだろうか。

V 野村胡堂の文学的世界

野村胡堂の文学的作品は科学小説、少年少女小説、時代小説、捕物帳、評論など広範な領域にわたっている。そして捕物帳にも池田大助捕物帳、丹次捕物、吉三捕物、銀次郎捕物、銭形平次捕物控等がある。なかでもよく知られているのは銭形平次捕物控であろう。もっとも、よく知られている作品がはたして胡堂の作家としての本領を発揮しているものなのかどうか、それは議論のあるところであろう。小説家高橋克彦はロマン作家としての胡堂は評価するが、「銭形平次の物語は胡堂にとって余技に等しい仕事だ」²⁷⁾と言う。これは的確な批評というべきかも知れない。だが、ここでは銭形平次捕物控を取り上げ、この作品の世界がもっている特徴を見ることにしよう。

野村胡堂が銭形平次捕物帳を書くことになったのは、当時『オール読物』の編集長だった菅忠雄の依頼による。これを受けて胡堂は岡本綺堂をかなり意識しながら、新しい捕物帳を構想するのである。そして胡堂は「人を罰するのではなく、すべての人を許してやる捕物帳」²⁸⁾を書くことになる。その第一作「金色の処女」が昭和6年(1931年)4月創刊の『文藝春秋 オール読物号』に発表されるのである。

この捕物帳の特徴を胡堂自身がつぎのように語っている。まず第一は「容易に罪人をつくらぬこと」、第二は「町人と土民に愛着をもったこと」、第三は「侍や通人は徹底的にやっつけたこと」、そして第四は「全体として明るい健康な捕物にしよう」と心掛けたことである²⁹⁾。

銭形平次の捕物帳が勧善懲悪の小説だと言われることを胡堂は迷惑に思う。というのは、

勸善懲悪小説とは滝沢馬琴のようなものを言うのであって、その特色は徇法的屈從的であって、つまり長いものには捲かれろ主義だからである。勸善懲悪とはいわば『八大伝』の忠孝仁義主義にほかならない。銭形平次の世界は決してそんなものではない、と胡堂は言うのである³⁰⁾。

胡堂の銭形平次は十中八九までは罪人を許し、逆に偽善者を罰するのである。法科で勉強した胡堂によれば、近代法の精神は行為を罰して動機を罰しないところに見出されるが、一方、銭形平次はその動機にまで立ち入って偽善と不義を罰する。「ヴィクトル・ユーゴーは、『レ・ミゼラブル』を書いて、法の不備とその酷薄さを非難し、古今の名作を生んだ。私は銭形の平次に投銭を飛ばさして、『法の無可有郷』を作っているのである。こんな形式の法治国は、^{まげもの}鬻物の世界に打ち建てるより外には無い。」³¹⁾

さらに胡堂は農民の子として、侍に対する反発について語る。彼は反権力的な考えの持ち主でもある。「私は貧しい百姓の子で、三代前の祖先は南部藩の百姓一揆に加わっていたはずである。」³²⁾ 子供の時分から彼は、侍の世界が虚偽と空威張り馬鹿々々しさに満ちていることを聴かされて育ってきた。また彼がまだ子供であった頃には、馬に乗って歩いているときでも、侍の子孫たちが来ると馬から降りてお辞儀をしなければならなかったのである。こうしたわけで「銭形の物語の中に、祖先が人を殺した手柄で、一生無駄飯を喰っている、侍階級に対する反抗が散見するのはやむを得ない」³³⁾ というのである。

銭形平次捕物控は昭和32年(1957年)に発表された「鉄砲の音」をもって終える。総計383編に及ぶが、このすべてに共通している特徴は「侍の肩をもっていないということ」³⁴⁾ であり、「土民や町民に鼻負していること」³⁵⁾ であるという。

胡堂の倫理観は単純明快である。「私は昔から士族というものが嫌いである。私の祖先は南部藩の百姓一揆に加わっているが、その血がやはり私にも流れているせいだろうか。四百二十幾篇を通じて、侍というものはトコトンまでやっつけている。〔中略〕人を殺すというようなバカ気たことは大嫌いである。私は初めから侍は無駄めし食いだとハッキリいっている。」³⁶⁾

また男女間のモラルも明快である。これはむしろ潔癖といってよいかもしれない。小説家とか芸術家などにしばしば見られる退廃を胡堂は厳しく退ける。「いわゆる通人、風流人といったものも私は嫌いである。私は厳格な一夫一婦主義だから、そうした通人というような人物はひどい目に遇わしている。」³⁷⁾ たしかに銭形平次捕物帳には美男美女も出てくるし、八五郎女難、平次女難というようなことも書かれている。しかし胡堂は、男女関係についていわゆるさばけた通人というものを認めないのである。

胡堂が描く平次の世界は江戸を舞台にした庶民の世界である。平次は弱い立場にあるものの立場に共に立つ。弱い立場の者、それは女性でもある。だからこの捕物帳では「とりわけ無辜の女を虐げる者は必ず罰せられるだろう。八五郎のように、私はフェミニストだからである」³⁸⁾。

こうした平次の生きる世界が胡堂の倫理的な世界なのである。そしてそこにわれわれはキリスト教の影響を見ることができる。このことは胡堂自身も認めているのである。「これはやはり私の暮らしが生真面目なせいだろう。うちの応接間にはオルガンが置いてあって、教会の連中が日曜毎に礼拝にくる。生活も質素一方で、酒も煙草ものまず、遊びというものを知らない。」³⁹⁾

それでは捕物小説が多くの人に愛されるのは、なぜなのであろうか。胡堂はその理由を、批評家の言葉を引用しながらこう述べている。探偵小説評論家の白石潔氏は捕物小説の特徴として「それは江戸の風物詩であり、日本の詩情に訴える季節感の芸術であり、庶民の味方であり、幕府時代の横暴なる権力階級に対する反抗の面白さである」⁴⁰⁾と述べているとして、胡堂はこの指摘を「まことに面白い言葉」⁴¹⁾と言う。捕物小説の作家たちはこうした点をはっきり意識していなかったかも知れないが、誰の捕物小説であれ、多少とも、そうした特色を具えている。捕物帳が人に愛される理由はそうしたところにあるのだらうというのである⁴²⁾。

いうまでもないが、野村胡堂が銭形平次を書く以前に、すでに捕物帳という時代小説の類型があったのである。菅忠雄が捕物帳の執筆を胡堂に依頼するとき、こう語ったのである。「雑誌を創めることになったが、その初号から、岡本綺堂さんの半七のようなものを書いてくれないか」⁴³⁾と。これに対して胡堂は「綺堂先生のようにには出来ないが、私は私なりにやってみよう」⁴⁴⁾と引き受けたのであった。

それでは野村胡堂は岡本綺堂をどのように評価しているのであろうか。「岡本綺堂先生が『半七捕物帳』というものを書いたのは、ともかくも日本の文壇には大きな『劃時代的』な事であった。捕物小説という形式は、一部に多少の非難はあるにしても大衆に愛されて育っていくに違はなく、^{向後}大きな発展を約束されているだけに、その創始者の岡本綺堂先生の業績は永く記念されていいと思う。」⁴⁵⁾つまり岡本綺堂はその優れた戯曲『修善寺物語』や『新皿屋敷』だけでも、文人として不滅の業績を残したと言えるだろう。しかし捕物作家たちにとって、また捕物小説を愛する一般の人々にとっては、『半七捕物帳』なしには岡本綺堂という作家を考えることはできない。「『半七捕物帳』に描かれた江戸の風物とあの詩情と、それに一脈のほの温かい人情味は、大衆読物の神髄に徹するものだからである。」⁴⁶⁾

さらに胡堂は綺堂の作品を芸術作品として捉えているのであって、決してたんなる娯楽小説と見做しているのではない。「私は、むろん、半七捕物帳を愛読している。探偵小説としては、どぎつuitところのあるものでなく、いわば、うすあじの作品と言えるが、江戸の情緒を描き出したあの背景は素晴らしいし、一服の、ほのあたたかい人情味とともに、芸術作品としては、高いクラスのものだと信じている。」⁴⁷⁾

野村胡堂が新しい捕物帳の世界を構想しようとするとき、岡本綺堂の外にも捕物帳がなかったわけではない。胡堂が銭形平次を初めて発表したのは昭和6年(1931年)である。そのころ佐々木味津三も捕物帳を書いていたのである。すなわち昭和3年から7年までの5年間にわたって発表された『右門捕物帖』がそれである。しかし、菅は綺堂のような捕物帳といって、佐々木のそれとは言わない。また胡堂はほとんど佐々木味津三について言及していない。それはなぜなのだろうか。

胡堂が銭形平次を考えだすにあたって佐々木味津三の右門捕物帳をとくに意識しなかったとすれば、それは菅が胡堂に執筆を依頼するにあたって語った〈岡本綺堂の半七のようなもの〉という言葉がその念頭にあったからなのかも知れない。あるいはまた佐々木味津三の捕物帳の主人公は、胡堂の嫌う侍であるということなのかも知れないのである。近藤右門は南町奉行所同心である。また『旗本退屈男』にしても、そこに描かれているのは侍の世界であり、これは胡堂のつよく嫌う世界であることは改めて言うまでもないことであ

ろう。

胡堂は銭形平次の範を岡本綺堂の半七捕物帳に取った。胡堂はつぎのように書いている。「私の先生は、生前一度もお目に掛かったことしげきの無い岡本綺堂先生であったといつて宜い、私の『銭形平次捕物控』は、『半七捕物帳』に刺戟されて書いたもので、私は筆が行き詰まると、今でも『半七捕物帳』を出して何処ともなく読んでいる。」⁴⁸⁾ このように胡堂が半七捕物帳を高く評価するのはなぜなのであろうか。彼はさらにこう続ける。「『半七捕物帳』は探偵小説としては淡いものだが、江戸時代の情緒を描いていったあの背景は素晴らしく、芸術作品としても、かなり高いものだと思っている。」⁴⁹⁾

それでは胡堂はどのようなところに自分の捕物帳の特色をだそうとするのであろうか。それは、もう少し探偵小説としての色彩を強めること、また探偵小説といつても「少しでもモラルの高いもの」⁵⁰⁾ にしたいということである。そうして胡堂はその捕物帳において「旧式の義理人情——低俗な偽善的なものを憎み続けた」⁵¹⁾ のである。

胡堂は「岡本綺堂先生の真似まねはととても出来ない」⁵²⁾ と言って、その代わりにもう少し探偵小説としての性格を持たせようとするのである。胡堂は綺堂のどういう点を真似ができないと言うのであろうか。それは江戸時代の情緒を描くという点であろう。もちろん胡堂は若くして上京し江戸の姿、江戸の情緒を求めて歩いたのであり、川柳を詳しく研究もし江戸の風物を探求したのである。しかし何といつても胡堂は東北、岩手の農村の出身である。一方、岡本綺堂は明治5年(1872年)に旧幕臣の子として東京に生まれているのである。どんなに胡堂が江戸研究を行ったといつても、また彼の筆力をもってしても、江戸を描くことにおいて岡本綺堂には及ばないと言わなければならないのであろう。

実際、野村胡堂はこうも書いているのである。「岡本綺堂先生の半七捕物帳のよさは、筋をはこんでいる中に、桜さく御殿山や、二十三夜の湯島台が、ありありと、まぶたに浮かんで来る。」⁵³⁾ いってみれば、岡本綺堂は失われゆく江戸の生活を生きていたのである。半七捕物帳に江戸の情景が^{ありあり}と描かれているのも、綺堂の文才だけでできることではないのである。

さらに胡堂は捕物小説をたんなる娯楽のための小説と考えているのではない。それ以上のもの、芸術作品としての品位を具えたものを彼は捕物帳に要求しているのである。捕物帳は「明るく楽しく、後味の良い」⁵⁴⁾ ものでなくてはならない。しかしそれだけでは十分とは言えない。胡堂はこう述べているのである。「私は決して捕物小説の現状に満足しているものには無い。捕物小説も、娯楽小説であると共に、文学としての一つの形式を確立し、芸術作品にまで地位を高めなければならないのである。ドストイェフスキーの『罪と罰』がかつて試みたように、人間の心のうちから、天使と悪魔とを抽出して、最高文学の領域にまで、その創造を高めなければならないのである」⁵⁵⁾ と。

VI あらえびすと西洋音楽

野村胡堂はまた「あらえびす」の名で西洋音楽の紹介と普及にも情熱をもって力を尽くした。このペンネームは、胡堂の「胡」を平仮名表記にしたものと言われている。たしかに胡堂自身がこう説明していることもあって⁵⁶⁾、従来、そのように考えられてきた。しかし金田一京助によれば、「あらえびす」はすでに中学時代の胡堂のあだ名だったのである⁵⁷⁾。

ところで、あらえびすの音楽への情熱には並々ならぬものがある。彼は「国民の教養のために、よき音楽が、もう少し尊敬されなければならぬ」⁵⁸⁾ という。レコードは日本人の西洋音楽の趣味を向上させた。この点においてあらえびすはレコードの功績を高く評価する。日本に西洋音楽が導入されたといっても、人々の生活の楽しみとして西洋音楽が受け入れられるようになるのは、陸海軍音楽隊の民間演奏、そして蓄音機とレコード録音法とによつてのことだったのである⁵⁹⁾。

胡堂が新たに「あらえびす」というペンネームで報知新聞に文章を書き始めたのは、関東大震災の翌年、すなわち大正13年(1924年)7月6日及び翌日の7日、レコード音楽記事においてであった。ベートーヴェンの「第九シンフォニー」が初めてレコード化されたと聴いて、胡堂は喜びのあまり、「ベートーヴェンの九つのシンフォニーはいかにレコードされているか」という意味の文章を二日にわたって連載したのである⁶⁰⁾。さらにこの年の8月には、あらえびすは報知新聞に「音楽漫談ユモレスク」という記事を掲げ、毎週一回ずつ書いているのである。その際、彼はイギリスのレコード雑誌『サウンド・ウェーブ』や『グラモフォン』、フランスの『音楽と楽器』誌、アメリカの『フォノグラフ月評』誌などを参考にしながら、この記事を書き続けたのである⁶¹⁾。

あらえびすは音楽という芸術の領域においても、求道者とも言えるような芸術論を語っている。捕物帳に芸術作品としてのモラルの高さを要求する胡堂は、音楽も芸術であることに変わりない以上、その作品に、作曲家に、また演奏に、演奏家に、モラルの高さを要求するのである。彼の『名曲決定盤』の本文はヴァイオリン曲から、そしてその演奏家はクライスラーから書き始められている。クライスラーの演奏について述べるにあたってあらえびすはこう書いているのである。「いかなる芸術でも、その最後の値打を決定するためには、創作者、演奏家の人格にまで戻らなければならない。不良少年型のいわゆる天才は、一時、ジャーナリズムの波に乗って、天下の人気を背負って立つことがあろうとも、それは全く稲妻のようにはかない一閃光で、永遠に人の心を高め得るものではない」⁶²⁾と。そして彼はクライスラーの人となりについて、「クライスラーは、ヴァイオリンを捨てても、人間として、褒められ称えられていい人である」⁶³⁾と称賛する。「クライスラーの弾く小曲に、くめども尽きぬ人間味の溢れるのは、この人間クライスラーの心の中から流れ出る情味のためではなからうか。」⁶⁴⁾

またピアノ曲の演奏家パデレフスキーについてあらえびすはこう語っている。「大統領であり憂国の志士であることが、パデレフスキーが音楽家であることに、一点一画も加えるところがないと言うならば止めよう。が、すべての芸術は、その人格から発露する。人格のない人に、芸術はあり得ず、卑俗陋劣な人間に、美しくも気高き芸術が生まれる筈はない」⁶⁵⁾と。あらえびすは芸術家に高いモラルを要求する。それはなぜなのであろうか。彼はこう答えるであろう。「人は音楽家である前に人間でなければならないのは、ちょうど我ら創作に従う者が、小説家であるよりも人間である方が正しいと同じ真理である」⁶⁶⁾からであると。音楽であれ小説であれ、人間の魂を高め得るような芸術作品は優れた人格からこそ生まれ出るものだからである。したがって音楽家でも小説家でも、人は何よりもまず「正しい人間でなければならない」⁶⁷⁾のである。

このようにあらえびすは芸術を語りながら広い意味でのモラルを説いているのである。「楽聖物語」は彼が尊敬している音楽家たちの列伝であるが、とくにその記述にあたって、

彼は、音楽に関心も趣味も知識もない人にも、その作曲家たちの作品に興味を持ってもらえるような啓発的な伝記を心がけたと言い、さらにこう語っている。「もう一つの望みは、一般青年のために、日頃関心を持った作曲家の伝記を通して、私のささやかな人生観と芸術論を説きたかったのである。」⁶⁸⁾ それは彼の芸術についての確信による。その確信とは次のことである。「芸術は畢境^{ひつぎょう}作者その人である。個性なくして芸術はあり得ず、創作者その人を知らずして作品の真髓^{ほんずい}を把握することは甚だむつかしい。」⁶⁹⁾

Ⅶ 野村学芸財団の創設

胡堂の晩年、昭和38年(1963年)、財団法人野村学芸財団が創設された。基金1億円は胡堂の私財であった。野村学芸財団の目的は「奨学生志望のしおり」のなかに次のように記されている。「この法人は、経済的理由により修学が困難な事情にある優秀な学生・生徒に対し、奨学援助を行ない、もって社会有用の人材を育成し、あわせて学術および芸術の研究を助成し、わが国の教育の発展と世界文化の進展に資することを目的とする」。

松田智雄はこう述べる。「父の生涯が意味したものは、東西の文化の交流であり、また、文化の深みへの探求であった。」⁷⁰⁾ そうした意味から、この財団はとくに東西文化の交流を大きな目的としている。また創設者の業績からして、芸術とりわけ西洋音楽の研究に対する理解もこの財団の特徴と言うべきであろう。さらに女子教育に対する関心もこの財団の特徴であって、毎年、優秀な女子大学生を奨学生として採用している。そして奨学生たちと役員との交流もこの財団の特色であると言ってもよいであろう。

この財団の創設について、胡堂の生涯の友人であった金田一京助はこう書いている。「その亡くなられる寸前に、学費のない若者の為めにと、投げ出された一億円の義金には、さすが大物の君のやり方、凡そ寄附金は、今まで、富豪の投げ出した百万円、千万円の話はよく聞いたことだが、一介の文士にして、古今未曾有の一億円の寄附は、大物だった君の本領を発揮して余蘊がない。我々友人までもお蔭で肩身が広い。」⁷¹⁾

野村長一はこの財団が創設されて2ヵ月もしない昭和38年(1963年)4月14日、肺炎のため死去。享年80歳であった。

結 び

野村胡堂はひとつの優れた生涯を生きたと言えるであろう。内村鑑三は誰でも後世へ残すことのできる遺物があると言い、それはよく生きることであると説く。胡堂の生涯と仕事はそういう意味でも、われわれに残された大きな遺産の一つであると言ってよいであろう。そして実際、胡堂がその生涯をとおして求めつづけたのも、よく生きることであったと言えるように考えられるのである。ひろく人々に親しまれてきた銭形平次捕物控にしても、胡堂はこれを娯楽読物以上のものに、永遠に人の心を高めうるような芸術作品の品位を持つようなものにしようとしていたのである。そうした信念は音楽を語るときにも一貫しているのである。どんな芸術であっても、その最後の価値を決定するのは、創作者、演奏者の人格なのである。芸術とはつまるところ創作者の人格だからである。これが胡堂の芸術上の信念であり、人生を生きるうえでの信念に他ならないのである。

われわれは野村胡堂・あらえびすの生涯に、宮澤賢治の詩「野の師父」に示されているような骨太の生き方を見出すことができるであろう。地位や権力とは無縁に、毅然と生きる生き方がそこに示されていると言えることであろう⁷²⁾。優れたあるいは豊かな人生を生きたという点では、野村胡堂は同じく岩手を郷里とする石川啄木や宮澤賢治と共通していると言えるであろう。

彼らの生涯を考えると、そこに共通している人生の課題とは貧しさであろう。岩手の風土といえは、多くの人は寒さとそしてそれに密接に結びついている貧しさを思うことであろう。岩手に生きる人間はつねに貧しさと共にその人生を生きてきたと言ってよいのかも知れない。そうした貧しさとこれらの人々がどう関わって生きたのか。その違いが彼らの生涯の相違でもあったのである。しかし彼らの生き方に共通して見出されるのは、太田愛人が言う〈他者へ向って開かれてある心〉であろうと思われるのである⁷³⁾。

岩手の風土とはなにか。この問いに対して、こうした人々を生み出してきたもの、それが岩手の風土なのだといわれわれは答えることができるであろう。野村長一は岩手の土地に根ざした生涯を生きたといいよい。たしかに彼は郷里を離れはしたが、しかし彼のペンネームは野村胡堂・あらえびすなのである。東北の地、文化の恩恵に浴することのない野蛮な土地、そこに生きる人間であることを野村胡堂はあるいは誇りにしていたのかも知れない。しかし胡堂は大衆文学の世界に優れた仕事を残しただけではない。この「あらえびす」はまた音楽にも深い造詣をもち、その洗練された文章をもって西洋音楽を日本に紹介し普及するためにも大きく貢献したのである。

岩手の風土に生きる人間、その人間の姿は高村光太郎の詩「岩手の人」に表現されるといってよいであろう。岩手の人間は「地を往きて走らず、／企てて草卒ならず、／ついにその成すべきを成す」⁷⁴⁾。野村胡堂も石川啄木も、そして宮澤賢治も、それぞれがその生涯をとおして「ついにその成すべきを成」したと言えるのではないのだろうか。

註

- 1) 米地文夫「生涯学習における『自地域学』と社会科教育における地理分野—生涯を通じて身につける学力とは何か—」『社会科教育研究』（日本社会科教育学会）No.69, 1993年10月, 35-44頁。
- 2) 野村胡堂・あらえびすの生涯が、中学校の「道徳」の教材に取り入れられている。『中学 わたしたちの道徳 3年（岩手版）』（根本行庸編集, 学習研究社, 1987年）所収「四文銭が飛ぶ」がそれである（同書, 181-188頁）。この文章は改訂されている（福田昌弘編集『中学 わたしたちの道徳 3年（岩手版）』（学習研究社, 発行年は1992年と推定される, 157-164頁）。
- 3) 野村胡堂『随筆銭形平次』旺文社文庫, 1979年10月, 初版, 9頁。
- 4) 同前, 19頁。
- 5) 同前。
- 6) 野村胡堂『胡堂百話』中央公論社, 中公文庫, 1981年6月, 第1刷, 30頁。
- 7) 同『随筆銭形平次』20頁。
- 8) 同前, 21頁。
- 9) 同前, 13頁。

- 10) 同前, 66頁。
- 11) 同『胡堂百話』, 26頁。これは胡堂の農民的性格を示す表現でもある。
- 12) 桑原武夫「解説」(桑原武夫編訳『啄木 ローマ字日記』岩波書店, 岩波文庫, 1980年10月, 第7刷), 249頁。
- 13) 野村『胡堂百話』, 26頁。
- 14) 同前, 29-31頁。
- 15) 同前, 30頁。
- 16) 野村胡堂・あらえびす調査会編『野村胡堂・あらえびす ―かたくりの群れ咲く頃の―』岩手県紫波町発行, 1995年6月, 初版, 66頁。
- 17) 野村『胡堂百話』9頁。
- 18) 同前, 9-10頁。
- 19) 金田一京助「ああ野村胡堂君」(『野村胡堂を偲ぶ』野村学芸財団, 1964年9月), 17頁。
- 20) 同前, 18頁。
- 21) 野村『胡堂百話』, 10頁。
- 22) 同前, 10-11頁。
- 23) 同『随筆銭形平次』, 29-30頁。
- 24) 野村胡堂『面会謝絶』(岩手県立図書館所蔵) 乾元社, 1952年2月, 再版, 44頁。また野村胡堂『コーヒーの味』(野村胡堂・あらえびす記念館所蔵) 東方社, 1995年12月, 136頁。この引用文末尾の表現に「タイ福音書」第3章11節の影響を読み取ることができる。
- 25) 同『随筆銭形平次』, 157頁。
- 26) 同前, 162頁。
- 27) 高橋克彦「ロマンの先達」(野村胡堂『美男狩』〔下〕, 講談社, 大衆文学館, 1995年10月), 196頁。
- 28) 野村『随筆銭形平次』, 193頁。
- 29) 同前, 195頁。
- 30) 同前, 150-151頁。
- 31) 同前, 151頁。
- 32) 同前。
- 33) 同前。
- 34) 同前, 194頁。
- 35) 同前。
- 36) 同前。
- 37) 同前, 195頁。
- 38) 同前, 151頁。
- 39) 同前, 195頁。
- 40) 同前, 154頁。
- 41) 同前。
- 42) 同前。
- 43) 同前, 145頁。
- 44) 同前。

- 45) 同前, 157頁。
- 46) 同前, 157-158頁。
- 47) 同『胡堂百話』, 52頁。
- 48) 同『隨筆銭形平次』, 161頁。
- 49) 同前。
- 50) 同前。
- 51) 同前。
- 52) 同前。
- 53) 同『胡堂百話』, 208頁。
- 54) 同『隨筆銭形平次』, 170頁。
- 55) 同前, 180頁。
- 56) 同『胡堂百話』, 63頁。
- 57) 金田一京助「野村胡堂さん」(『野村学芸財団会報』第1号, 1965年10月), 4頁。『金田一京助全集』第15巻(三省堂, 1993年10月), 74頁。この渾名の命名者は金田一京助であると
する説もある(前掲, 野村胡堂・あらえびす調査会編『野村胡堂・あらえびす』52頁)が,
その根拠は不明である。
- 58) あらえびす『名曲決定盤』(上), 中央公論社, 中公文庫, 1981年9月第1刷, 36頁。
- 59) 同前, 24頁。
- 60) 同前, 16頁。
- 61) 同前。
- 62) 同前, 38頁。
- 63) 同前, 39-40頁。
- 64) 同前, 40頁。
- 65) 同前, 164頁。
- 66) 同前, 165頁。
- 67) 同前。
- 68) あらえびす『楽聖物語』電波新聞社, 1990年7月, 第2刷, 11頁。
- 69) 同前, 12頁。
- 70) 松田智雄「一粒の麦」(『野村胡堂氏を偲ぶ』野村学芸財団, 1964年9月), 42頁。
- 71) 金田一, 前掲「野村胡堂さん」5頁。
- 72) 太田愛人『辺境に生きる 野の師父を求めて』講談社, 現代新書, 1985年11月, 第1刷, 205
頁。
- 73) 太田愛人「他者のために (for others) — 先人に学ぶ — 」(1993年度岩手県立盛岡第一
高等学校進路講演会, 1993年6月8日〔火〕の講演記録)。
- 74) 『現代日本文学大系27 高村光太郎・宮澤賢治集』筑摩書房, 1969年9月, 79頁。

参 考 文 献

佐藤昭八(編集発行代表)・北條 格・頼 愛子編集発行『野村胡堂・あらえびす著書目録

付：松田（野村）瓊子著書目録，関係記事・文献索引，年譜』編集発行代表者住所=埼玉県新座市，1995年（平成7年）12月。

太田愛人「新渡戸稲造と野村胡堂」『新渡戸稲造研究』（財団法人新渡戸基金，岩手県盛岡市）第5号（1996年9月），121-137頁。

小木新造『東京時代 江戸と東京の間で』日本放送出版協会，NHKブックス，1996年2月，第7刷。

幸田露伴『一国の首府 他一篇』岩波書店，岩波文庫，1993年5月，第1刷。

中川靖造『創造の人生 井深大』講談社文庫，1993年2月，第1刷。

縄田一男『捕物帳の系譜』新潮社，1995年4月発行。

三田村鳶魚（朝倉治彦編）『捕物の話 鳶魚江戸文庫1』中央公論社，中公文庫，1996年9月。

三田村鳶魚（朝倉治彦編）『江戸の女 鳶魚江戸文庫2』中央公論社，中公文庫，1996年10月。

三田村鳶魚（朝倉治彦編）『横から見た赤穂義士 鳶魚江戸文庫3』中央公論社，中公文庫，1996年11月。